はしがき

メディア教育開発センター創立20周年記念シンポジウムはメディア教育開発センターとしては改組２周年、放送教育開発センター創立からは20年目の平成10年11月18日に開催された。すなわち、区切りとしての二つの意味合いを合せ持つ。このためシンポジウム趣旨については、当初より過去の総括と今後の展望のどちらに重点を置くかの議論があった。どちらも意味のあることではあるが、結論的には未来志向、すなわちメディア教育開発センターの今後の在り方を中心に据え、いっそうの発展に乞う御期待とアピールするべきとの考えがかった。過去を懐かしむより、攻めに出ようというわけで、この機に宣伝をしようというわけだ。

これまでの２０年間の進化の経緯も全く無視するのではなく、今後を展望するうえでのヒント材料としては紹介の意味もあろう。これは、午前中朝一番の所長挨拶の中で十分紹介してもらう他、これまで刊行された文書等にできるだけお任せする。また基調講演では、社会の現状と将来がいかにメディア教育開発センターを必要とするかという根拠になりそうな話を集客力のある講演者に依頼する。午後いっぱい使ってのパネルディスカッションで、世界が目指すべきメディア教育開発を展望しようとの企画となった。

こうして、シンポジウム趣旨は「次世代メディアへの提言」とする。次世代メディアが備えるべき機械・装置の機能、ならびに教育利用を念頭にした画像・音声などの品質はどうあるべきかにテーマを絞った。明確な結論を出そうというのではない。参会者はじめ多くの人々に対して、上記の機能と品質に関し専門的観点からの情報が提供され討議がなされることで、次世代メディアに対してアイデアを出すための思考基盤を提供しようと目論んだためだ。

漫然とした「高等教育とメディアについて」という内容なら、誰であっても一過言あって意見を言えるという指摘から、会場にわざわざ来ていただいた参会者に対し、来て絶対得をしたという気分を持ってもらうためには、パネリストがその人自身でなければできない情報の提供をするくらいのことは必要だと考えた。総論の言いっ放しと違って専門知識をまず提供する必要があり、パネリストには正確なデータ整理など発表準備が要請されることとなり、御負担をおかけした。

さて、メディアテクノロジーの進歩は現在なお急速に進行中で、当面はまだまだネットワーク整備などハードウェア／ソフトウェアシステムの基盤整備、教育への応用として遠隔教育システムなどの運用ノウハウの基盤整備、そして日常的に当たり前のように利活用する情報・ネットワーク文化意識の基盤整備がすすんでいる。

そうした基盤整備が一応の完了を見たその後でネットワーク社会における教育の新たな構築と展開がはじまるであろう。発展途上にある現在、たとえば遠隔教育を、出張費が浮くとか、対面授業より緊張感が無いとか、といった議論がなされるが、いい悪いを言うのは早すぎる。誰もが未経験なのである。やってみないことにはわからないことが多く、できる限りの経験を蓄積することが現在重要である。アイデアとビジョンとモデルこそが求められている。そのための思索の起点として、できるだけ多くの人々が、次世代メディアの機能と品質について考え、アイデアを創出するための材料を提供することをシンポジウムの目的とした。

なお、パネルディスカッションにおいて、安田浩先生は米国ラスベガスから、渡邊光雄先生

にはSCSにより筑波大学より参加・発言いただいた。シンポジウムへの参加・発言には、会場に歩を運ばれる手段もメディアテクノロジー利用による手段も、今や全く区別の必要はない。

本シンポジウムはメディア教育開発センターだけでなく、現在の社会潮流にそった意味でも参加者にとって関心が高い。当日は登壇者の情報提示に続き、パネリスト間の討議およびフロアとの活発な討論が展開され、少なからぬ触発的情報を参加者全員が得られたものと確信している。

本報告書は苑復傑助教授の全面的編集作業によって作成された。

1999年8月10日

メディア教育開発センター創立20周年記念
シンポジウム実行委員会委員長
永　岡　慶　三